

豪雨などの自然災害では、特別養護老人ホーム(特養)など高齢者施設の入居者がこれまでも犠牲になってきた。熊本県南部を襲った豪雨でも、同県球磨村の「千寿園」で14人が心肺停止状態に。甚大な風水害が各地で相次ぐ中、どう対処すればいいのか。自力避難が困難な高齢者を支える現場で模索が続く。(1面参照)

# 高齢者施設 犠牲また

## 熊本豪雨

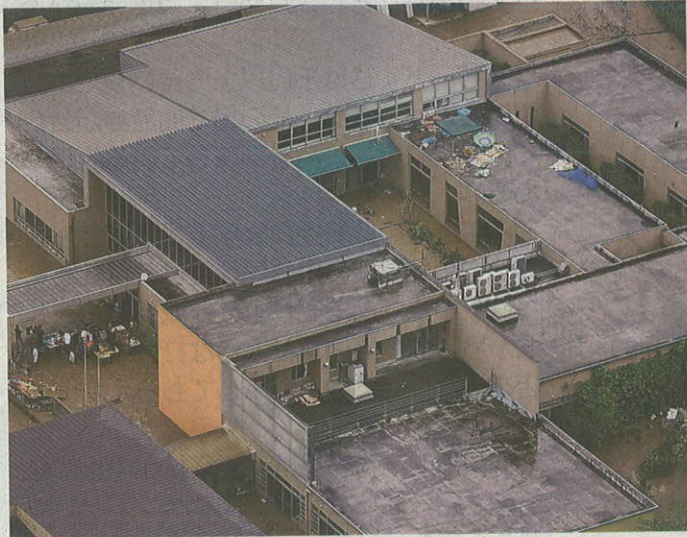
### 事前対策 早めの行動を

救助に参加した地元住民によると、職員らが入居者らを2階に避難させたのは4日午前4時すぎ。当直の職員数人に、15人ほどの地元有志が加わった。施設内にエレベーターはなく、自力歩行できない高齢者たちを4〜5人で抱えて階段を上った。そのため避難に時間がかかったとみられる。

日本の三大急流・球磨川の支流のほど近くにある千寿園は水害の危険と常に隣り合わせだ。国土交通省によると、千寿園は年2回の避難訓練を実施。避難計画も策定していたというが、「川が近いのにエレベーターがないのはなぜなのか。結果として水害に最も弱い建物になっている」。ある特養関係者は疑問を投げ掛ける。

集中豪雨や台風の被害が

湿った空気が流れ込み(暖か)が日本付近でぶつかり合



豪雨で球磨川が氾濫し、浸水した特別養護老人ホーム「千寿園」=5日午前、熊本県球磨村(共同通信社ヘリから)

増える中、高齢者施設の入居者が巻き込まれるケースは相次ぐ。2016年の台風では若手県岩泉町の高齢者グループホームに氾濫した川の水が浸入し、入居者9人全員が犠牲に。一方、19年の台風で浸水した埼玉県川越市の特養「川越キングス・ガーデン」では、避難計画に基づいた早期避難が功を奏し、入居者全員無事だった。

未曾有の水害を想定し、対策強化に乗り出した施設もある。広島県福山市の特養「五本松の家」は、18年の西日本豪雨をきっかけに、独自の避難計画を策定した。千寿園と同様、施設は河川に近接した場所に立つ。避難計画では、豪雨の警

戒レベルが低い段階でも、職員が多い昼間の時間に利用者を施設の2階もしくは3階に、エレベーターで避難させると規定。避難訓練を年に1回実施しているほか、同じ部署の職員同士で緊急時の伝達訓練を随時実施するようにした。

田原久美子施設長は「火災と違い、水害は実際に被害が及ぶまでに多少の時間がある。事前に対策を定めて早めに行動すれば、全員を助けられるはずだ」と話す。

国は17年、川の氾濫で浸水する恐れがある老人福祉施設などに対し、避難先や移動方法を計画にまとめ、訓練実施を義務付けた。だが、昨年3月末時点で計画を作成していたのは約36%にとどまる。

高齢者福祉に詳しい結城康博淑徳大教授(社会福祉学)は「高齢者の避難には時間がかかる。日ごろから災害リスクをきちんと受け止めているかどうかで生死が分かれる。万が一に備えて常に危機感を持ち、先を讀んで対応することが必要だ」と指摘する。

## 愛媛県DMAT 熊本に派遣決定

医師と看護師の2人

熊本県南部を襲った豪雨を受け、愛媛県は5日、災害派遣医療チーム(DMAT)の隊員2人を被災地に派遣することを決めた。2

東中予は6日、局地的に激

## この人

比較文明論から情報論まで、幅広い領域で独創的な仕事を残した梅棹忠夫さん(1920〜2010年)。

この知の巨人が著作のために作り半世紀近く埋もれていた構想メモを読み解き、「梅棹忠夫の『日本人の宗



知の巨人、梅棹忠夫さんの構想メモを解説し、

## 県内大雨警報を

空気が流れ込み、前線の活動が活発となる。これまで